

社長に聞け!

社長 Through History

コピーライター出身の社長だから経験した面白いこともあるはず。社員でさえ知らなかった社長の姿が見えてきます。

コピーライターに

なる前は何をしていたんですか？

いろんな仕事をしたよ。よく覚えているのは沖仲仕、ホテルマン、電気工事屋。沖仲仕とは、貨物船の荷降ろしやる人ね。

若いときは小説を書いていたんだ。筆一本でメシを食うなんてのに憧れてね。定職につかずに昼は貨物船、夜は原稿用紙に向かって小説を書いていた。もっと前は詩も書いていたね。

文学青年 だったんですね。好きな作家は誰ですか？

いやあ、文学青年なんていう柄じゃない。好きっていうか、影響を受けた作家は野坂昭如、阿部公房、三島由紀夫かな。

ただ小説を書いていたときは、ずっと自分のスタイルを模索していた。あるとき開高健のある作品にであって、これでいいんだと思ったね。ありのままの文章で、それでいて深い。

なぜコピーライターになろうと思ったのですか？

"筆一本でメシを食う"という自分には自然の成り行きといえるかな。

コピーライターを始めたころの生活はどんな感じでしたか？

24歳のときだね。とにかく仕事がない。当然、事務所もないから屋号は『伊東』という名前だけ。広告会社にも勤めてなかったから、仕事のコネもない。大阪に制作プロダクションが集まるブロックがあったんだが、とにかくそこを歩いた。それで仕事がもらえそうなところに飛び込んでいくが、門前払いだね。当時はデザイナーの間でさえコピーライターというものの認知度が低く、「複写機売りに来たの？」なんて言われたこともある。

ただ、毎日顔を出すと、「お金も資料もないけど、原稿書く？」なんて言われる。それで原稿を書いてもっていくと、「ふーん、資料なしでも書けるんだ」なんて言われ、仕事が増えだした。そういった制作専門のプロダクションにとっては驚きだったんだろう。1つの製品に対してその世界をつくることができることが。短いけれどもその製品のストーリーが広告に織り込まれるんだから。そういった点で多少なりとも小説を書いていたことが役に立ったね。

そのころ どんな仕事をしていましたか？

大阪 北新地の飲み屋さんのPR誌を書いたり、お店のオープンのDMが多かったよ。

どこで原稿を書いていたか？

そのころはワープロも当然ない時代で、すべてペン、手書き原稿だよ。打合せを終えたら、事務所がないから客の少なそうな喫茶店で書くが、せいぜい30、40分が限界だね。店の目があるからあまり長居はできない。だから地下鉄のホームで書いていたよ。一番端のベンチ。ラッシュ時じゃなけりゃ、1、2時間は書き続けた。意外と集中できる。

シンタックスの前にシー・エー・ビーイングという名で

会社を興していますが、初めて会社にしたときはどんな思いでしたか？

25歳のときに、やっと南船場で3坪の事務所をもった。始めてから3、4年は1人でやっていたが、仕事は徐々に増え、多いときには1日で7、8本を書いていた。それである代理店から声がかかり、当時の阪急ブレーブスの広報誌『ザ・ブレーブス』の取材・編集をするようになった。タブロイド版8ページくらいだね。そのときは優秀なカメラマンや放送作家とジョイント

社長に聞け!

社長 Through History

して刺激になったよ。西宮球場にはよく行ったなあ。

そしてライターのアシスタントを入れた。そのころから広告の全てをやりたいと思うようになった。デザインから全て。コピーライティングという広告の一部では満足できなくなったんだね。それがシー・エー・ビーイング。当時の仕事としては阪急ブレーブスの仕事をしていた関係で、広告制作でもスポーツ業界が多かった。野球、ゴルフ、スキー用品が多かったね。でも結局、スポーツ業界の仕事はやめた。やっぱりあまり野球が好きではなかったんだ。好きなら今でもやっているからなあ。

大阪から 東京に進出する決め手となったのは何ですか？

大阪という土地柄か、当時はお愛想ができないと仕事になりづらい。だからスピード感っていうものが感じられなかった。俺はライターだからお愛想ではなく、原稿でっていう気持ちがあった。それが功を奏することもあったが、失敗することもあった。おとなしいライターじゃなかったから、クライアントと喧嘩したこともあった。考え方の違いだね。それだけ真剣勝負だったんだ。それと東京に本社がある会社が多い。すでに会社は10人くらいになっていたから俺は単身東京へ行った。

それが シンタックスですね。東京へ来た当初はどうでした？

仕事は全くなかった。あらかじめ仕事の目処があって行ったわけじゃないから。まず、初めはどこに事務所を出せばいいかもわからない状態だよ。当時、六本木の不動産屋が物件を紹介してくれるということだったので、暮れも押し迫った雪のちらつく夜、鞆1つで東京にいった。夜10時、新幹線から降り立ち、赤坂のホテルに泊まった。とても寒かったと今でも覚えている。次の朝、不動産屋に行き、乃木坂の事務所を紹介してもらった。

なぜ乃木坂にしたかって？六本木に近かったからだろうな。それで単身、東京にでてきたはいいが、仕事はひとつもない。携帯電話がある時代じゃないから事務所から出られないんだ。いつ電話が鳴るかもしれないから事務所で電話を待つだけ。コンクリートの壁を見つめてると、空しくなってくる。どうすることもできないな。悔しかったなあ。

でも3ヶ月目くらいから仕事は来るようになった。東京で原稿を書き、大阪に送り、大阪でデザインしたものを東京にまた送るってやっていたが、それではあまりに効率が悪い。だから東京にもデザイナーを入れて大きくしていった。当時はPCもメールもないから、東京と大阪でのやりとりがそんなに器用にできるわけではないからね。

その当時 から上下水道（公共事業）を中心とした

管材の仕事をしていたのですか？

そう、当時は日本が儲けていた時代で、日米構造協議により内需拡大をアメリカから言われていたんだよ。いわゆる1980年代半ばの日米経済摩擦だね。それで下水道などの公共事業が盛んになり、その流れにうまく乗った。やっぱり公共事業の中心は東京だから、見込みは外れていなかったんだな。

コピーライターから 社長になってどうですか？

経営者になってからは達成感はない。経営者っていうものは何かを達成するたびに課題が吹き出してくる。だから日々、宿題を抱えている状態だからね。正直、一番よかった時代は定職につかずに小説を書いていた時代だな。一晩で10枚とか15枚とか書けるときがあるんだ。その書いている瞬間は神の声が聞こえたな。ギュスターブ・モローもそんなこと言ってるね。

社長に聞け!

社長 Through History

コンピュータの発達で変わったことは何ですか？

当社がコンピュータ化したのは早かったよ。俺自身DTPという概念ができる5年前にそのことを察知していた。まだDTPという言葉のカケラもないときに、某メーカーに今で言うDTPを実現できないのか？と聞いたことがある。「申し訳ありませんが今の技術じゃできません」と謝りにきたよ。DTPによってローキャリアが短期間でハイスキルになったが、本質は何も変わっていない。原稿もデザインもやっぱり考えることが全てだよ。それ以外のことは効率的になったが、考えることをコンピュータはしてくれない。

今、一番気になることは何ですか？

携帯端末とかネットワークがSPにどう活用できるか？ということかな。ユビキタスの創り手になりたいものだ。

今後のシンタックスの展望をお聞かせください。

広告って基本的に表現を上手に魅せることだけど、本当にいい製品は本当に浸透させたいと思う。それは広告という販促ツールのみでなく、マーケティング支援というカタチで当社が市場開拓のお手伝いをできれば、と考えている。広告制作を超えた制作会社、市場を創造できる会社になりたい。

最後に社員に対してこうしてほしいという部分は？

当たり前のことだけど大人としての礼節をもってもらいたい。制作マン・制作ウーマンは比較的、自分の世界に没頭しがちだからね。でもきっちり外に向けてアンテナを立ててほしい。やっぱりクライアントへの対応も、社内での関係も礼儀・礼節が基本だからね。

更にそうすることでクライアントを意識し、常に営業的な部分をもって制作ができるようになる。周りを見ようとしないうという甘えは大人として、社会人として捨ててほしい。

長らくありがとうございました

おいおい、これで終わりか？まだ仕事のことしか聞いてないだろ。もっと、俺の趣味とか休暇の過ごし方とか聞くことはないのか？

長くなりすぎましたので個人的な話はまた別の機会に。だいたい端折った部分もあるかと思いますが今回はこれで終わりにします。

次回をまたお楽しみに！

社員の目

社長について

企画室

トガワ

コピーライター



社長がコピーライター出身ということもあって鍛えられます。見習う部分ばかりで足を向けては眠れません。まさに師匠と弟子といった関係でしょうか…。

身体に染み付いた思考の根本、今までの表面的な考え方を根こそぎ洗い流されました。それは言葉で伝えられるものではなく、社長の生き様から感じるものなのかもしれません。兎に角、それこそがコンピュータではできないものであり、コピーライターの武器なのだと今では感じます。

催事PD室

ハヤシ

展示会担当



全てにおいて先輩であり上司です。最近歳のせいあまり見られなくなりましたが遊ぶことも全力！仕事も全力！叱るときも全力！その背中からは働く技よりも生き方を日々教わっているような気がします。